

〈抵抗〉なき「オタク」の可能性について

——「アニメ聖地巡礼者」を事例として——

甲南大学大学院人文科学研究科博士後期課程 入江由規

1 目的

この報告の目的は、「オタク」とされる人物の、新たな可能性について述べることにある。

「オタク」は本来、SF 大会において、参加者が相手を「おたく」と呼びかけていたことからその名がついたため、平仮名で表記される存在であった。平仮名で表記されることが多かった時代の「おたく」は、「ネクラ」と同義であり、世間からいわれのない差別を受けてきた。だが、岡田斗司夫 (2010) や宮台真司 (岡田・宮台 2007) によれば、「おたく」は、そうした差別への「怒り」を創作意欲に変え、社会や学校空間に〈抵抗〉する姿勢をみせることで、「オタク文化」の礎を築いたとされる。

近年、テレビ番組において、出演者が自らを「オタク」と名乗る場面がたびたび見られるなど、「オタク」を公言できるくらい、日本社会は「オタク」に対して寛容になったと思われる。その結果、いわれのない差別を受けることがなくなり、「怒り」を創作意欲に変える機会が失われ、「オタク」に創作能力がなくなったと、岡田は『「おたく」の死』を宣言した。しかし、今日の「オタク」は、社会や学校空間に〈抵抗〉する必要はなくなったものの、趣味や価値観を共有する人で形成される、「趣味縁」と呼ばれる関係を築き、「オタク文化」の発信を行うなど、依然として創作能力を発揮している。報告者はここに、新たな「オタク」の可能性を見出した。

なお、「オタク」の定義は、論者によって異なるところがある。この報告では、斎藤環 (2009) の定義を参考に、アニメなどの「虚構コンテクスト」と親和性が高い人を「オタク」と考える。

2 方法と結論への展望

この報告では、〈抵抗〉なき「オタク」の可能性を示す事例として、アニメの舞台のモデルとなった場所や、キャラクターの名前の由来となった「地名」を実際に訪れ、カメラに収める活動を行っている「アニメ聖地巡礼者」を取り上げる。報告者は 2011 年より、スノーボール抽出を用いて、「アニメ聖地巡礼者」に聞き取り調査を行っている。その結果、「アニメ聖地巡礼者」は、アニメの舞台のモデルとなった場所を訪れる中で、必ずしもアニメに対する理解がある訳ではない地元住民とも交流を図り、彼らと会話を重ねることで、信頼関係を築いていることが分かった。

「アニメ聖地巡礼者」は、地元住民と信頼関係を築き、アニメの舞台のモデルとなった町を盛り上げるべく、町おこしを兼ねたイベントを開催したりするなど、新たな観光資源を生み出すことで、彼らにとっての「ゲスト」へと変貌を遂げている。「アニメ聖地巡礼者」は、必ずしも趣味や価値観を共有する訳ではない人とも関係を築くことで、地域の活性化に一役買っているのである。「アニメ聖地巡礼者」のこうした取り組みから、浅野智彦 (2011) が述べる、「趣味縁からはじまる社会参加」の在り方を考察することができるだろう。

なお、本稿執筆段階において調査は継続中であり、報告の内容が、本稿と異なる場合がある。

文献

浅野智彦, 2011, 『若者の気分 趣味縁からはじまる社会参加』岩波書店.

岡田斗司夫, 2010, 『遺言』筑摩書房.

岡田斗司夫・宮台真司, 2007, 「僕らがバトンを受け取る日」宮台真司『宮台真司ダイアローグ I』イプシロン出版企画, 291-332.

斎藤環, 2009, 『関係する女 所有する男』講談社.